

## イニシエーションとしての初潮儀礼

今村 薫

### I はじめに

ミルチャ・エリアーデが1958年に発行された著書『生と再生』において、「近代人はもはや伝統的な型のいかなる加入礼も持っていない」と述べて久しい。加入儀礼(イニシエーション)とは、ある社会的・宗教的地位を変更し、別の集団への加入を認めるための一連の定式化した行為のことである。エリアーデは同書の中で、部族社会における成人式、秘密結社への加入儀礼、シャーマンの加入儀礼などについて考察し、それらに共通して「死と再生」、「人格の根本的変革」という宗教の基本的構造が存在するのを見いだした。加入儀礼がおこなわれるのは、限られたメンバーがある特定の集団に入る場合が多いが、成人式だけは、社会の構成員すべてを対象として行われる。

成人式はまた、通過儀礼としても分類される。通過儀礼とは、誕生、成人、結婚、死などの人生の節目にともなう儀礼のことである。人は、それぞれの段階に応じた新しい役割や身分を獲得しながら成長していくものであり、社会は人々の通過に際して儀礼を用意している。通過儀礼は、その過渡期にある者に試練や課題を与えることもあるが、むしろ不連続な、ときには危険をともなう移行を安全に成し遂げるための支えとなるものである。ファン・ヘネップ(1909=1977)は、さまざまな文化における通過儀礼を比較、分析し、これまでの位置からの「分離期」、中間の境界上にある「過渡期」、そし

て新しい位置への「統合期」という儀礼の過程を明らかにした。

成人式をイニシエーションと捉えるか、通過儀礼と見なすかは、1つは形式上の違いによる。成人式をイニシエーションと捉えた場合、儀礼を終えた若者が加入すべき集団あるいは結社のようなものの存在を前提としている。一方、成人式を通過儀礼と見なした場合は、儀礼を通過した若者は特定の集団を構成する必要がない。したがって、イニシエーションとしての成人式と、通過儀礼としての成人式は理念的に区別すべきであるという立場もある(アレン, 1967=1978)。また、イニシエーションが秘儀的性格を持ち、加入者の心理的変容に焦点がおかれるのに対し、通過儀礼は公開され、参加する若者たちには社会的な役割が期待される場合が多い。しかしながら、実際におこなわれる成人式には、秘儀的要素と、祝祭的、公共的な要素が交互に織りまぜられているものである。

この小論では、グイ/ガナ・ブッシュマン<sup>(1)</sup>の初潮儀礼をとりあげ、この儀礼の全過程と構造を明らかにする。彼らはアフリカ南部カラハリ砂漠にすむ狩猟採集民である。グイ/ガナの初潮儀礼については、少女を祝福して女性たちが踊るエランド・ダンスが知られており(Silberbauer, 1963, 田中, 1978)、これは初潮儀礼の中のもっとも祝祭的で華やかな部分である。しかし、エランド・ダンスが踊られている間も少女は薄暗い小屋の中に隔離されており、小屋の外の賑わいとは対称的である。また、初潮儀礼

の全容は数年間という長期間に及ぶ試練と自製の連続なのである。

ところで、グイ/ガナは、かつて男性の成人儀礼もおこなっていた。男性の成人儀礼は、20代前後の若者を集め、キャンプ（居住地）から離れたブッシュの中で、厳格な「女人禁制」でおこなわれた。約1ヵ月間の規律正しい集団生活をおくり、年長者に「ものを見るための分別（菅原、1996：51）」を教わったという。ただし、この儀礼への参加は任意であり加わらなかった若者も多数いた（今村、1998：67）。

成人儀礼は、1960年代に1度行われたのを最後に廃止された。理由はいろいろ挙げられるが<sup>(2)</sup>、筆者は男性の成人儀礼の舞台装置が単調だったことが重要な原因であると考えている。成人儀礼が、年長者からの一方的な訓戒に終始し、秘儀性のみが強調され、初潮儀礼のような祝祭性や相互性に欠けていたからではないだろうか。また、人間と自然との豊かな相互作用の思想を、男性の成人儀礼には反映させることに失敗したのではないだろうか。現在は、女性を対象にした初潮儀礼のみが実施されている。

一般に初潮儀礼は成女式ともいわれ、成人儀礼の一種とみなされる。男性の成人儀礼は、一定の年齢に達した若者を集めて集団でおこなわれ、年長者たちがその儀礼を執行することによって、若者たちを正式に共同体のメンバーに加入させるという機能をもつ。

しかし、女性を対象とした成女式は初潮という個人の身体的変化に合わせて個別に行われる。また、男性の成人式のような、ある年齢階梯の集団や秘密結社といった加入先の集団が無い場合が多い。とくに父系が厳密な社会では、女性は他の集団へ婚出するものであり、彼女が生まれ育った共同体のメンバーにはなりえない。これらのことから、エリアーデ（1958＝

1971：94）は成女式の特徴として、「第一に男の成人式ほど広くは分布していない。第二に男の成人式ほど発達していない。第三に成女式は個人的なものである」ことを指摘した。

このように女性の成女式は社会的に周辺部にあるにもかかわらず、多くの伝統社会で少女が初潮を迎える度に儀礼がおこなわれるのは、初潮という「生理的成熟」の兆候が少女個人に突然あらわれるからである。社会がこの生理的現象に「社会的成熟」を合わせるかぎり、2つの「成熟」のギャップを埋めるためには儀礼が必要なのである。

社会的成熟、すなわち社会的心理的に大人になることを、彼らはどのように考えているのだろうか。グイ/ガナの一連の初潮儀礼に流れる主題は「影響力」である。大人とは、社会的に他人に影響力を及ぼすものであり、また、人間以外のすべての存在物、つまり自然に対しても無視しえない力を行使する主体である。少女が自然に与える影響力についてしばしば言及されるのは「感応する」という概念である。儀礼中の少女に「感応して」、雲や風は怒気をはらみ、動物たちは敏感さを増して凶暴になるという。そして、少女のおこない次第では、すべての人々に多大な災いが降り懸かることにもなりうる。それぞれの少女に課せられた儀礼を通して、彼女たちは「その社会と宇宙における責任（エリアーデ、1958＝1971：95）」を直接に知るのである。

グイ/ガナ語で「儀礼」にあたるツォー（tsoo）という単語は、本来「治療」や「薬」を表す言葉である<sup>(3)</sup>。私は、別稿（今村、1998）でグイ/ガナの儀礼全般について分析したが、初潮儀礼についても、人間関係を調整したり、自然を慰撫するという「癒し」を目的にしている。そして、その癒しの源泉力は、少女が自分の影響力

を自覚し、自身の感受性を鋭敏にすることにある。この自己の感受性を高め、人格の根本的変革を促すという点で、グイ/ガナの初潮儀礼はきわめて宗教的であり、イニシエーションとしての条件を備えているといえよう。

本稿において、筆者は参与観察と高齢の女性からの聞き取りをもとに、あるべき姿としての「正統」なグイ/ガナの儀礼像を描き出すことに努めた<sup>(4)</sup>。ボツワナ共和国カデ地区に住むグイ/ガナたちは、急速な近代化の波を受け、1980年ごろよりディーゼル・エンジンの付いた井戸の周辺に定住し、食糧配給を受けるようになった(田中, 1986)。狩猟採集は堅実におこなわれているが、技術的に難しい弓矢猟だけは完全に廃れてしまった。また、かつてのように初潮まえの少女が婚約者と暮らしているということもない。したがって、以下の章で述べる、〈水場の治療〉〈弓矢の治療〉〈初潮儀礼に組み込まれた結婚の治療〉は現在はおこなわれていない。また、近年、小屋に隔離される期間を短縮したり、2回目の儀礼を省略したりと儀礼が簡略化される傾向がある。しかし、これらを除けば、初潮儀礼は一通りの形式を今日もおおよそ踏襲している。

## II 初潮儀礼の概要

### 1 儀礼の期間

初潮を迎えると同時に少女は「ツィヤーハ」(/kiyaha)の状態に入る。ツィヤーハとは、動詞ツィー(/kii)の完了形である。ツィーは月経一般を指すのではなく、儀礼中の特殊な状態を意味する。男性の成人儀礼においても、儀礼中の男性はツィヤーハと表現される<sup>(5)</sup>。伝統的な治療師の見習い期間にある人もまたツィヤーハであるといわれる。ツィヤーハとは、「通常を超

えた能力を得るための修練期間」のことであろう。

少女はいつまで、ツィヤーハという儀礼状態を続けるのだろうか。儀礼の始まりは明確だが、儀礼を終える時期は決まっていない。また、儀礼を完了したという明確な境界があるわけでもない。少女は少なくとも3回目の月経が終わるまでは、儀礼用の帽子を被り続けたり、13種類の動物の呼び名を変えたりするなどの決まり事を守らなければならない。しかし、それ以上儀礼の状態を続けるか否かは、その年の雨の状況や少女の意志などの個別の事情によって異なるのである。少女がこれらの行動規制を怠ると、少女自身とまわりの人々に災厄がもたらされると信じられている。災難の最も甚大なものは日照りである。日照りによって狩猟採集活動は壊滅的なダメージを受けるので、少女は雨季が始まり十分に雨がもたらされるまで自分の行動を規制する。長い人では1年近くも儀礼用の帽子を被り続けるという。帽子を脱いだあとも、食物回避や動物名を変えるという儀礼状態をさらに数年間続ける。

## 2 隔離

### 2-1 小屋に隔離する

採集に出ていた少女は、初潮が始まったことに気づくとその場に坐りこむ。一緒に採集に行っていた女たちが少女の変調に気づき、少女を横たえさせる。女たちの中の年長者が、saasa(木本, 未同定)という薬木を噛んでから唾を少女の足に吐きかける。まず、少女の足の甲に、次に足の裏に、それから経血の染み込んだ砂に唾を吐きかける。さらにその砂は灌木の根元に捨てる。これをおこなうことによって、「水の重みで草が倒れるくらい雨が降る」「雨が降って食べ物が育つ」「土地が貧弱にならない」と表現さ

れるような雨と豊かな実りがもたらされるとい  
う。

少女は、皮のローブ<sup>(6)</sup>を頭からすっぽり被っ  
てキャンプの近くまで歩く。キャンプが近くな  
ると女たちは少女を取り囲み、男から少女を見  
えないようにする。その輪の中で少女は年長の  
女性に背負われてキャンプまでたどり着く。以  
上の儀礼を〈帰らせる〉という。

キャンプに着くと、女たちは他の小屋から少  
し離れたところに手早く少女を隔離するための  
小屋を建てる<sup>(7)</sup>。小屋の入り口は、キャンプの方  
を向けずにつくる。イネ科の草コム//koam  
(*Eragrostis nindensis*)の穂先の柔らかい部  
分をつんで集め、小屋の中に敷き詰める<sup>(8)</sup>。準備  
ができると、女たちは小屋の周りで初潮儀礼の  
歌〈エランド〉を歌って少女を小屋に入れる。  
少女は穂を敷き詰めた所に横たわり、上から皮  
のローブをかけられる。

エランドはカラハリ砂漠に生息する大型のレ  
イヨウである。脂肪が多くまるまると太った動  
物であるが、敏捷で跳躍力にすぐれている。グ  
イ/ガナにとって、エランドは理想の女性像を表  
象している。初潮儀礼とエランドの結びつきは

深く、初潮儀礼で踊られる歌とダンスのことを  
〈エランド〉という。また、初回と2回目の月  
経も雌雄のエランドでいい表される(表1)。

## 2-2 隔離中の儀礼

小屋に隔離されている期間中は、少女は排泄  
のときを除いて小屋から外に出るはいけない。  
とくに男性には絶対に姿を見られてはいけな  
い。男性も少女が隔離されている小屋に近づ  
いてはいけない。少女は、小屋にいるときも頭か  
ら皮のローブを被ってじっと横たわっていな  
ければならず、人に話しかけることも許されな  
い。初潮儀礼を中心になって執り仕切るオバ<sup>(9)</sup>は、  
少女のそばに付き添って訓戒を伝授する。それ  
には後述するように、動物の呼び名を変えるこ  
とや、儀礼中に気をつけなければならないこと、  
また、ものを人々と分け合うことなどのグイ/ガ  
ナの社会で守らねばならないことが含まれる。  
少女は儀礼全般を通じて慎み深くしていなけれ  
ばならない。

少女が小屋に隠ってから最初の食事のとき  
に、オバは〈食べさせる〉という儀礼を少女に  
施す。オバが少女の手のひらの拇指球に剃刀で

表1 月経の名称

1 回目の月経	qx'ao gyuu 「オスのエランド」	qx'ao /kii 「オスの (大きな) ツイー*」
2 回目の月経	//gae gyuu 「メスのエランド」	//gae /kii 「メスの (小さな) ツイー*」
1 回目と 2 回目の 月経を合わせて	gyuu /kii 「エランドのツイー*」	
3 回目の月経	//nua ts'ii //?oa-ma !gan 「キネを投げる」	
4 回目の月経	≠qx'aro-ma //noo 「カロの木 ( <i>Ziziphus mucronata</i> ) を通り過ぎる」	
5 回目以降の月経 (月経一般の表現)	//noe-ma ts'ao 「月をつくる」 /?ee ts'ene owa ha 「焚き火の煙の中にいる」 !gari 「(小屋を) 葺く」 ii-ma ts'ao 「(小屋の) 木をつくる」 ≠kena ≠noena 「(小屋に) すわっている」	

\* ツイーとは、注 5) にあるように「修練によって日常を超えること」を意味する言葉である。



傷をつけてから、その上に〈食べる葉<sup>(10)</sup>〉をのせ、オバが少女の手首を掴んで彼女にその〈食べる葉〉を傷口から滲み出る血とともに嘗めとらせる。この儀礼を経て少女は食事を口にすることができる。この後、少女は食事の度に、料理の半分を先にオバに分けなければならない。これらの行為を怠ると、少女は下痢と嘔吐が続いて痩せ衰えるという。

隔離されている間の少女は、空腹や、尿意、便意などを自分から訴えてはいけない。オバに尋ねられてからはじめて、少女は食事や排泄などの欲求をはたすことができる。排泄は、オバに付き添われて夜陰に紛れておこなう。儀礼中の最初の排便時に、オバが〈排便させる〉をおこなう。グイ/ガナたちは排便後、小枝で肛門についた便をとりのぞく習慣を持っており、〈排便させる〉において、オバは saasa を噛んだ唾を吐きかけた小枝で少女の尻をきれいにしてやる。この儀礼を怠ると、少女に関わるすべての人々が、排便時に小枝で尻を傷つける災難に遭うとされる。

### 2-3 過渡期の踊り 〈エランド〉

初潮を迎えた少女を祝福して、同じキャンプに住む女たちだけでなく、他のキャンプの女たちも少女の小屋を訪れる。女たちが集まると、〈エランド<sup>(11)</sup>〉を踊る。この踊りは、動物のエランドを真似て、上体を前に倒して小刻みのステップを踏み、身体を上下に揺するというものである。女たちは皮のローブや腰蒔きを脱ぎ、皮の前掛けだけをまとった姿になる。そして、大きなお尻を突き出し、尻と乳房を左右に揺らして誇示しながら踊る。集まった女の半数は歌い手にまわり、立ったまま手をたたき、甲高い声で〈エランド〉をうたう。踊り手は踊りながら一列になって小屋の周りをまわり、数回ま

わったところで先頭の女が手を振りかざして小屋の入り口に一步足を踏み入れる。これをきっかけに、歌声とダンスはびたりを終わる。続いて女たちの笑い声や「うまくいった」という賞賛の声がわき起こる。女たちは、小休止をはきみながら何回も心ゆくまで〈エランド〉を踊るが、必ず日中には踊り終わらなければならない。〈エランド〉に合わせて野生動物が凶暴になると信じられており、夜間はとくに危険性が増すからである。

小屋の中では、少女が横たわり、数人のオバたちが少女に付き添っている。〈エランド〉に合わせてオバの1人がノミの刃で斧の刃を打ちつけ、「カーン、カーン」と高い金属音を出す。この金属音を少女の耳元に美しく響かせると、少女は人々のいうことに心から従うようになるという。

この踊りには、男性は近づいてはいけないことになっている。しかし、例外的に1人ないし2人の老齢の男性が踊りに加わることがある。老人は、2本のエランドの角に似せた枝を頭につけて女たちの踊りに加わる。これは、1頭のオスのまわりに複数のメスが載れているエランドの群の様子を描写したものである。

〈エランド〉を踊っている間は、少女と同じキャンプに住む男たちは決して大型動物の狩り<sup>(12)</sup>には行かない。ブッシュの動物は初潮儀礼中の少女に「感応」し、このことによって獲物は狩人をいち早く発見し、怒り狂い、狩人に攻撃してくるという。少女が小屋に隠れているときに男たちが狩猟に行けば、彼らはは狩りに成功しないばかりか、命を落とす時まで信じられている。

### 2-4 〈垢を) こすって (小屋から) 出す〉 やがて少女の出血も止まり、オバたちは少女

を小屋から出す日取りを決める。オバは、少女の経血が止まっていることを確かめるだけでなく、脇の臭いをかいで少女の体調も観察する。小屋から出す日は満月のころが望ましいので、月齢を見計らって〈垢を〉こすって(小屋から)出す儀礼をおこなう日を決定する。彼らは月によって日数を数えている(表2)。少女が小屋に隔離される期間は、平均して2週間くらいになる。

満月の日の朝に、〈こすって出す〉が遂行される。オバが//nan (*Citrullus lanatus*) という野生メロンの種子を粉にしたものを、少女の身体に塗り付けて垢と一緒にこすり落とす<sup>(13)</sup>。それから、少女に入れ墨を入れる。オバは、少女の肩間、胸、両肩先、両肘、背中、腰、へその両側、両膝に剃刀で小さな傷をつけ、その傷口に植物の根を焼き焦がしてつくった〈薬〉を入れる。この〈薬〉は黒色だが、傷口に入れて時間が経つと美しい青色に変化する。傷口には、オバが口に含んだ〈食べる薬〉を吹きかける。これは少女の身体と心を太らせて、成長させるためであるとされる。

身体に傷をつけ入れ墨を入れることは、次節で述べるように本来少女のいいなずけの男性と2人でおこなうものであり、互いの血を混ぜ合うことによってこのまま結婚の儀礼へ進行する性質のものである。少女が1人でこの儀礼を受

ける場合は、少女の健康と成長を祈願することが目的になる。

入れ墨をいれた後、少女のイトコ<sup>(14)</sup>たちが少女の髪を刈ったり編み込んだり、ときには顔に化粧を施して、少女を美しく見せる。仕上げに少女の首に首飾りをかけ、さらにスティーンボックの皮で作った儀礼用の帽子<sup>(15)</sup>を被らせる。この帽子は少女の父やオジ、いいなずけが作ったものである。「雲が彼女の頭を見ると、雨を降らさずに通り過ぎてしまう」といわれ、少女はこの日から数カ月間、雨が降るまで帽子を被り続けなければならない。

儀礼用の帽子を被った少女は、ようやく小屋から出る。少女は長期間、薄暗い小屋に居たので、外の光で目がくらむ。オバが、!k'ao (*Stipagrostis sp.*) というイネ科の草で少女の目を覆ったまま少女を小屋の入り口に立たせる。それから、オバがその草を真中で折って外の明るい世界を少女に見せる。これを〈額を開く〉という。この行為は、年長者によって目が開かれ、知恵を授かるという意味がある。少女は、その日は再び小屋に入って休む。

翌日、〈訪問させる〉をおこなう。少女は同性のイトコたちに付き添われて、最初小屋から3方向に歩く。この日のために集まってきた女たちの間を通過して、頼りなげにゆらゆら歩く。次に、最も近い小屋から順に人々を訪ねる。訪問

表2 月齢の数え方

月齢	グイ語による月の表現	
0	[新月]	「月が寝返りをうつ」
3~4	[三日月]	「新しい月」「月が横たわっている」
15	[満月]	「月と太陽はイトコどうしだ」「月と太陽はからかい合う」
16		「月と太陽は同じ小屋に住む」(朝方に月を観ていう)
17		「月が若い女の小屋の中を煌々と照らす」
22前後	[下弦]	朝方見える月の総称を、!?ane-si という
28		「月が入った」「月が死んだ」

されると、それぞれの小屋では少女に食物を与える。3日目から、少女は1人で外出することができるようになる。

### 3 「いいなずけ」との結婚

グイ/ガナの少女は、初潮前の子どものころから「いいなずけ」が決まっていることが普通であった<sup>(16)</sup>。いいなずけから肉や皮製品の贈り物だけを受け取っている少女もいたが、両親のキャンプを出ていいなずけと同居する場合もあった。初潮前の少女との性行為は「無益無害」とされるので、いかに寝食をともにしていても結婚しているとはみなされない。やがて少女が初潮を迎え、初潮儀礼に組み込まれた結婚のための儀礼を執行することによって、少女といいなずけは正式に結婚したことになる。

初潮儀礼は原則的に男子禁制で、しかもオバなどの限られた女性だけが直接少女に接することができるのだが、例外的に、いいなずけの男性は初潮儀礼中の少女の小屋に招き入れられ以下のことをおこなう。

少女が初潮を迎えて小屋に隔離されると、オバはいいなずけを呼びつけ「火を私たちにくれ」という。すると彼は火おこし棒を持って少女の小屋に入る。少女は起きあがって、皮のロープを頭から被ってうつむいたまま、いいなずけと背中合わせに坐る。彼は「この女を取る（結婚すること）ができたらなあ」といいながら、火おこし棒を錐もみ状に受け木にこすり合わせる。火が点いたら、いいなずけは火おこし棒と受け木の2本を少女の枕元に刺し立てて帰る。この2本の棒は、少女が小屋に隔離されている間ずっと立てておく。

その後、いいなずけは朝になるとオバから呼び出され、少女と一緒に身体の〈垢を混ぜ合い〉、お互いに薬木を混ぜた野生の豆の粉を〈食べさ

せ合う〉ということを毎日繰り返す。

約2週間が経ちよいよ少女をくこすって出す〉日が来ると、いいなずけは少女と再び垢をこすり合って混ぜ合い、さらに、互いの血を混ぜ合うという儀礼をおこなう。オバが男女の額、胸、背中、腰、両肘、両膝を剃刀で傷つけ、傷口から滲み出る血液を混ぜ合わせる。これは、結婚の儀礼であり、〈血を混ぜ合う〉といわれる<sup>(17)</sup>。〈垢を混ぜ合う〉ことで互いのことが好きになり、〈血を混ぜ合う〉ことで愛し合うようになる。とくに胸の血を混ぜ合うことは、〈心を混ぜ合う〉といわれ、互いのことを深く欲するようになるといわれる。

初潮を経て、少女は一人前の大人の女性と見なされ、彼女の夫との結婚生活は、実質的に意味を持つものと社会的に承認されるようになる。

## 4 日常生活を送りながらおこなう儀礼

### 4-1 〈弓の治療〉

初潮を迎えた少女が小屋に隔離されている期間中は、男性は弓矢猟に行かない。「初潮儀礼中の少女は、動物を凶暴にさせる」からである。とくに女性たちが集まって〈エランド〉を踊ると、ブッシュの中にいる動物たちは「儀礼中の少女に感応して、怒り狂う」とされる。そのため、少女が小屋に隔離されている間、同じキャンプに住む男たちは猟に行かずに矢尻と矢軸を分け、それぞれを別の所にしまっておく<sup>(18)</sup>。

〈雄のエランド〉が終わって、少女が小屋から出ると、少女はオバに手伝われながら、キャンプのすべての弓矢を集める。そして、〈薬〉を弓矢に塗り、猟での成功をもたらすために、弓を握って次々に矢を放つ。この儀礼を〈弓の治療〉という。「このとき少女のおじが言う。『わしのメイがわしの矢を治療したので、わしは運よ

く動物を仕留めた。これでわしらは生きてゆける。さあ肉を食べて寝よう。』

#### 4-2 ブッシュと水場の儀礼

少女は隔離されていた小屋から出ると、もはや通常の生活に戻ったかに見える。しかし、まだ、いくつかの儀礼が残されており、生活に関わる採集活動や水汲みの際にも少女は自分の行動を律しなければならない。

少女はオバたちと採集に出かけ、食用の根茎を掘り、薪を折り取り、小屋葺き用の草を集めるという行為を儀礼的なぞる。これらは、それぞれ〈根茎を掘らせる〉〈薪を担がせる〉〈草を引かせる〉と呼ばれる。どの儀礼も、オバが少女に手を添えたり、オバが一度やって見せた行為を少女が真似して繰り返すということをおこなう。少女はあたかも初めて採集をするかのように振る舞い、オバに従う。これらの儀礼は、少女が小屋から出たのち最初の採集でのみ執行され次回から少女は普通に採集をおこなう。ただし、根茎を掘った場合は、儀礼期間中の数カ月間は、毎回掘った穴に砂を戻して埋めなくてはならない。これを怠ると、「掘った穴に風が吹き抜け、湿った砂が乾き、水も失せ、人々は焼け死んでしまう」とされる。したがって、少女がおこなう根茎掘りの儀礼は雨をもたらすためのもので、「彼女は雨の治療をおこなう」とも表現される。

薪と草については、この儀礼を怠ると、人々が薪や草で手足を切って怪我をするといわれる。採集に関する3つの儀礼は、少女が年長者に恭順さを示すことの他に、採集場であるブッシュを清めて人々を怪我から守り、さらにブッシュに雨をもたらすことを目指している。

少女は水汲みの際にも儀礼をおこなう。グイ/ガナが表面水を利用できたのは、1年のうちの

数カ月だけである。雨季に集中的に降った雨水がパン（石灰土壌の窪地）に溜まっている間、人々はその水をダチョウの卵で作った水筒などに汲み上げた。

水場の儀礼も、採集での儀礼と同様、少女はオバに指示されて水汲みの作業をなぞるという行為で成り立っているが、カリ/qari (*Acacia nebrownii*) という木をわざわざ儀礼用に使う点が採集での儀礼と異なる。カリはパンに生えるアカシアの一種であり、この枝で水面を打って水しぶきを上げ、それを水場の池に放り投げて浮かべる。

一度儀礼をおこなった水場では少女は次回から通常どおり水を汲めるが、初潮儀礼中に移住して新たな水場を利用することになれば、その都度この儀礼を施さなければならない。これを怠ると、パンに溜まった水はたちまち干上がってしまうという。少女は、水場の水が涸れないように〈治療〉する。カリの枝は、少女が儀礼を施したという証拠でもある。「その、パンに浮かんでいるカリこそが、ツェヤーハ（儀礼期間中）の少女が投げ入れたものである。」

#### 5 月経の繰り返しと儀礼

やがて、少女は2回目の月経〈雌のエランド〉を迎える。〈雌のエランド〉の儀礼は、初回の月経〈雄のエランド〉の際の儀礼と全く同じ事を繰り返すことになっている。すなわち、少女をキャンプに〈帰らせ〉、小屋に隔離し、女たちが集まって〈エランド〉を踊り、満月の日の朝に少女に入れ墨を入れて〈擦って出し〉、採集や水汲みのときの儀礼をもう一度おこなう。

3回目の月経が始まっても少女はもはや隔離されることはなく、通常的生活を送る<sup>(19)</sup>。3回目の月経も出血が止まって終了すると、少女はオバに付き添われて、同じキャンプに住む若者、

および近くのキャンプに住む親族の若者全員を集める。オバが若者たちの顎と胃のところの皮膚を剃刀で傷つけ、少女はその傷口に〈薬〉と彼女の唾液を塗り付け、さらに〈食べる薬〉を食べさせる。集められた男性はみな独身の若者ばかりであり、少女が採集、料理した食べ物を食べる可能性のある男たちである。この儀礼は〈歯と胃の治療〉といわれ、初潮儀礼中の少女が採集、料理した食べ物を食べた男たちが、歯痛と胃痛に苦しむのを防ぐとされる。

## 6 動物の回避

初潮を迎えるころの少女は、クーズーとダイカーの肉を食べてはいけない。そして初潮が始まると、少女はこの2種類の肉を食べてもいいが、今度はゲムスボック、スティーンボック、ハーテビースト、トビウサギ、ヤマアラシの5

種類の動物を食べてはいけない。これら5種の動物は、「強くて毒がある」といわれ、若い女性が食べると激しい下痢と嘔吐、場合によっては発熱や湿疹に苦しむとされる。したがって一定期間これらの肉食を回避しなければならない。肉食を再開するときは、腹部に切り傷をつけて〈薬〉を塗りこむという儀礼をおこなう<sup>(20)</sup>。

これら5種類の中で、ゲムスボックが一番早い時期に規制を解いてよく、〈雄のエランド〉と〈雌のエランド〉の間にこの肉を食べ始めてもよい。ゲムスボック以外の4種類は、数カ月から数年間回避しつづける。また、この5種類の肉は新生児にとって「強い」とされるので、新生児を持つ両親は子どもに食べさせないと同時に、彼ら自身もこれらの肉を食べないようにする。そのため、女性によっては最初は初潮にもなう自身の身体のために、のちには自分の子

表3 動物の忌み名

動物名	通常のグイ語	忌み名	忌み名の意味
スティーンボック	!gae	/gam/gam	小さな足でちょこちょこ歩く
ブッシュダイカー	!nua	!?oe xa	鼻面が長くて黒い
ゲムスボック	/xoo	//nhoe xa	顔の白黒の模様
エランド	gyuu	/?ero xa	額のふき毛
キリン	!nabe	//kara* <sup>1</sup> ma	カラの木 (キリンが好んで食べる)
ワイルデビースト	/kee	//khabe ma	外に広がって曲がった角
ハーテビースト	//xama	//nhaa xaba (F) //khoo xa (M)	ねじれて短い角 ねじれて短い角
クーズー	gyua	//goa ≠kee	大きな耳
ダチョウ	/gero	!kao !qx'ao	長い首
アフリカオオノガン	≠geu	/?oa //?aba	脚の臑
ヒョウ	!?oe	kx'oam* <sup>2</sup> ≠xari* <sup>3</sup> (F) kx'oam ≠qx'aa (M)	コムの木とカリの木 (2つとも植物名) コムの木とコム <small>の</small> 小さな実
ツチブタ	!goo	//?ame sa	蟻の巣 (ツチブタの食べ物)
ヤマアラシ	!noe	/xae ne	星の名

\* 1 アカシアの一種 (*Acacia erioloba*)

\* 2 kx'oam (*Grewia flava*) 果実を食する。

\* 3 ≠xari (*Pavonia senegalensis*) 根が心臓や腹の薬になる。

(F)は女性の呼び方。(M)は男性の呼び方。(F)(M)が無いものは男女共通。

どものために、特定の動物の肉食を連続して10年間以上回避し続ける人もいる(今村, 1998)。

さらに、初潮儀礼中の少女は、13種類の動物の呼び名を変える。この動物の「忌み名」のことをナーホ(naa-xo)という。ナーホは前段落で述べた「肉食回避」している動物も意味するが、食べることを避けているもの<sup>(21)</sup>だけでなく、名前を呼ぶことを避けている動物のこともナーホと言う。儀礼中であるために動物の名称を変えている状態を、「私はナーホの中に入っている」と表現する。

忌み名があるのは、狩猟において重要な動物(表3の上から10種)と、危険な動物(表3の下から3種)である。どちらの動物も初潮儀礼中の少女がその本名を呼ぶと「感応して」凶暴になり、人々が狩猟に失敗したり、ブッシュで動物に襲われると信じられている。これらの忌み名は、少女が小屋に隔離されている間にオバから教わる。動物の外見やその動物の食物によって忌み名をつけている。

危険な動物のうちツチブタとヤマアラシは、狩猟の対象でもある。また、人々が最も恐れるライオンは、あまりに危険な動物なので別名すらない。少女はその名を決して口にしてはならない<sup>(22)</sup>。

### 7 初潮儀礼の完了

少女は、〈雄のエランド〉以来かぶり続けていた皮の帽子を、3回目の月経、あるいは4回目の月経が終了すると脱ぐことができる。この帽子を脱ぐ時が、少女が儀礼期間をほぼ終了する時期である。このころから、採集で根茎を掘るたびに穴を埋めていたことや、新しい水場に行くたびにおこなっていた儀礼をしなくてもよくなる。ただし、ある日を境に儀礼がすべて完了するのではなく、次第に通常の状態に移行する。

帽子を脱ぐ日は基本的には少女本人が決め、特別な儀礼もおこなわれない。雨が降るまで被ろうと決めた人は、長く帽子を被り続ける。また、雨が来なくても、3回目の月経を迎えたことでよしとする人は、すみやかに帽子を脱ぐ。動物の呼び名を変えることは、帽子を脱いでからさらに1年ほど続ける。これも、本人の判断で、次第に通常呼び方に戻す。少しずつ規制を解いていくので、いつのまにか「初潮前の少女」は、「儀礼中の状態」を経て、「若い女」になっているのである<sup>(23)</sup>。

## III 考 察

### 1 エランドと豊饒性

初潮は〈エランド〉と呼ばれ、このカラハリ砂漠に生きる大型動物であるエランドは、女性の「豊饒性」を表している。初潮儀礼は、「性と豊饒の秘儀を教えるため(エリアーデ, 1958=1977)」におこなわれ、他民族においても初潮儀礼は豊饒をテーマにしたものが多い。たとえば農耕民の場合は、「おまえが10人の子どもを産むことができるように」と、多産を祈願した言葉を少女に投げかける(阿久津, 1996におけるアシャンティの例など)。これに対し、グイ/ガナの初潮儀礼には、生殖や多産を直接意味するようなものはない。「豊饒」というものの形が、農耕民と狩猟採集民で異なるのである。

ここで、エランドと世界の始まりについての民話を紹介する。この民話に登場するピーシツォワゴ(piisi/kowago)とは、「神霊であり造物主であるガマ(/gama)(菅原, 2000)」が民話の世界で語られる際のニックネームのことである。

昔、ピーシツォワゴはエランドを1頭

飼っていた。そしてアカシアの花の蜜を集めては、エランドに食べさせていた。ところが、ある日、ピーシツォワゴが蜜を集めに出掛けたすきに、ピーシツォワゴの息子たち（人間のこと）がそのエランドを食べてしまった。

ピーシツォワゴは怒ってそのエランドの屍体の腸から糞を絞りとり、その糞をあたりにまき散らした。すると、糞はたくさんエランドになった。人々はエランドの肉をたらふく食べた。

そこで、ピーシツォワゴはアフリカオオノガンの羽根でゼネー（羽根つきのような遊具）を作り空高く打ち上げた。すると、それは太陽になり、地上のものすべてを焼き尽くした。

人々は砂を掘り、灼熱の太陽から身を隠した。それでも熱さに絶えきれず、見悶えて叫んだ。すると、その叫び声が木々に変わり、人々はその木陰で休んだ。

やがて夜になった。あたりは暗くて何も見えない。そこで人々は、ガラー（球形の白いキノコ）を空に投げた。すると、ガラーは満月になり、人々は月光に照らされて家路についた。

この民話によると、太陽は神が人間を制裁するために造ったものであり、人間はそれに対抗して林や月を造ったことになる。神と人間の関係は、かなり対等だ。エランドは、神から人間が奪った「肉」である。そして、人間の仕業に怒って神が撒き散らした糞の中から再びエランドが生まれるという、いささか虫のいい話が続く。この民話におけるエランドの増殖は、「単為生殖」的である。

グイ/ガナにとって動物とは、植物が大地から

生えてくるように土地から湧き出すものであり、「雨が動物を太らせる」と表現する。このような雨と土地と動物が結びついた世界が彼らにとっての「豊饒」であり、この豊饒の連鎖の中にしっかりと人間も組み込まれているのである。

## 2 初潮儀礼の要素

少女の初潮を機におこなわれる数々の儀礼的行為には、どのような意味があるのだろうか。彼らの説明を整理すると以下ようになる。

初潮儀礼はいくつかの要素から成り立っている。1つは共同体の論理を少女に理解させることである。年少の者は年長者に従順でなければならない。少女は食事から排泄までの世話をオバたちから受け、オバが〈額を開く〉ことによって知恵を授かり、採集や水汲みの仕方年長者に教わらなければならないような未熟な存在である。また、すべてのものは共有しなければならないというイデオロギーも再確認する。少女は、食事の度にオバに食物の半分を分け、〈エランド〉を踊りに来る人々に祝福され、少女の親族は集まってきた人々に食事を分け与える。少女が隔離されていた小屋を出て人々の小屋を訪ねたときは、今度は人々から少女にもてなしの食事が提供される。

また、生理的成熟ともなって少女には結婚が用意されている。夫と毎日「互いの垢をこすり落とし合い」、〈互いの手から食べさせ合う〉ことで、互いを愛し、支え合って生きていくことを学ぶ。性交によって男女が穢るとされる〈病〉を予防するための儀礼もおこなう。〈病〉とは、〈汚れ〉（今村、1998）という概念で表されるような、社会的葛藤に起因する身体的不調であり、個人を超えて家族、ときには共同体全体が病に苦しむといった強い「共有性」をもつ。



儀礼の要素の2つめは、少女を保護することである。初潮という身体の突然の変化に対して、オバたちは少女を気遣って背負ってキャンプまで帰り、儀礼用に建てられた小屋の中に少女を横たえさせる。少女が小屋に隠れている間、関節などが痛くならないようオバたちが少女の身体をさすってやる。〈食べさせる〉で、少女の手の甲の傷に〈薬〉を入れるのも、〈こすって出す〉日の朝に身体に入れ墨を施すのも、少女の健やかな成長を祈願したものであるという。

3つめの要素は、しかし、少女を「危険な」存在であるとみなし、その危険な影響力を遮断しようとすることである。少女がさまざまな儀礼的行為を遂行することは、「雨をもたらし、水場と土地を豊かにする」「少女に儀礼を施された弓矢によって狩猟が成功する」といった幸福を約束するが、同時に儀礼をおこなわなければさまざまな厄災が人々に降り懸かるという「脅迫」が用意されている。「少女の料理を食べた男性たちが歯痛と胃痛に苦しむ」「人々に草木が突き刺さる」と直接人々を病傷に陥れるだけでなく、「動物が敏感になって狩猟に失敗する」「動物が凶暴になって人を襲う」という不運も招く。最も人々が恐れるのは、「雨雲が怒って通り過ぎる」と表現されるような「自然」の怒りをかい、旱魃を招くことである。

オバたちが、初潮の始まりの時に少女の足元の砂に唾を吐き、排便、採集、水汲みをおこなうブッシュにおいて少女が触れる物々に〈薬〉を含んだ唾を吐きかけること、少女をロープで覆って人目から隠すこと、キャンプに戻す際に少女を背負うこと、少女を小屋に隔離すること、これらは少女の「危険な影響力」を恐れて外界に直接触れさせないようにするための行為である。

グイ/ガナのおこなう初潮儀礼は、さまざまな

意味の要素が絡み合い、複雑な様相を呈している。これは、「儀礼のデッサン」とでもいえるような理念が先にあってそれに沿って個々の儀礼行為が組み立てられているのではなく、彼らが実践的に、あるいは経験的に複数の儀礼をつなぎ合わせているからではないだろうか。このために、境界の明確なゴールを目指すのではなく、少女の社会的成熟を促す「修練」である実践の一つ一つが、完結的に儀礼的世界を構成しているのである<sup>(24)</sup>。

### 3 感応する世界

儀礼中の少女が動物と影響を与え合うことを、グイ/ガナ語ではナレ(Inare)という動詞で表現される。例文を挙げると以下のようになる。

1) (肉食回避している動物を食べると)それを食べた人はナレして腹をこわす。2) (儀礼中の少女が動物を本名で呼ぶと)動物はナレして怒り狂う。3) 動物が、儀礼中の少女にナレして狩人に襲いかかり、彼を殺す。

ナレという動詞の意味論について日常生活の会話分析から検討した菅原によると、ナレは「感づく」「予感する」「酔う」という概念を包括した「人間のみならず動物や無生物の世界にまではりめぐらされた相互影響の回路を表している(菅原、2000)」という。

本稿においては、初潮儀礼における少女と動物の相互関係に注目し、ナレを「感応する」と訳した。少女がツィヤーハ(初潮儀礼中)であるときに、野生動物はブッシュに居ながらその少女に「感応して」立ち止まり、じっと狩人を見つめるという。狩人はそのために狩猟に失敗するばかりでなく、動物が角を振りかざし脚を蹴り上げて攻撃してくるので、殺されることさえあるとされる。狩人だけでなく、ブッシュの中を歩く人すべてがこの危険にさらされること

になる。動物の感応度が最も強まるのは、長い初潮儀礼期間中のうちでも、〈エランド〉のダンスを女たちが踊るときであるとされる。

大人になるということは、人間、雨、土地、動物などまわりのものすべてに影響力を持つということである。初潮儀礼中の少女は、隔離された薄暗い小屋の中でオバの語る話やまわりの音、匂いに感覚を集中させることによって、彼女自身の影響力に対する意識を高める。小屋から出たあとも、日常生活を意識的におくることによって、日常の行為がもう一つの世界と重なっていることを実感する。感応した動物が人間を見つめるその眼差しは、とりもおさず人間が動物を凝視する視線そのものなのである。

初潮儀礼は、思春期の少女の自意識を高め、感受性を鋭敏にし、少女が新しく生まれ変わることを目指している。少女は「修練者」であり、その意味でこの儀礼はイニシエーションである。また、相互的な「感応し合う」世界では、少女の自然への意識は、そのまま自然から人間への意識として返され、少女の変容は自然の変化でもある。人々は、少女の感受性を使い、少女の成熟とともに自然が豊饒になることを願っているのである。その意味で、グイ/ガナの初潮儀礼とは、大いなる自然を「治療」させ彼らの生活世界すべてを豊潤にさせようとしたものなのである。

\*この論文は、2000年度名古屋学院大学研究奨励金による研究成果の一部である。

## 注

(1) 調査対象はグイとガナの2つの言語集団からなる。彼らの言語の違いは方言程度で、彼らどうしは十分に言葉が通じ合う。また、通婚も日常的におこ

なわれている。

- (2) 「厳密な女人禁制で、知らずに儀礼場に近づいた女性を殺さなければならないほど厳しいので嫌気がさした」というのが、彼らが「成人儀礼を止めた理由」について述べる型にはまった言い方である。「政府が禁じた」という人もおり、1967年のボツワナ共和国独立にともない「前近代的」なものとして禁止された可能性もある。
- (3) 結婚式、初潮儀礼など、明らかな「儀礼」を指す言葉としてツォーがあるが、現代の医療行為や、薬全般もツォーといい、「治療」「治療」がもとの概念であることがわかる。初潮儀礼の中の個々の行為には、「～のツォー」という名称がついていることが多いが、グイ語を直訳したものはくゞでくり、たとえば〈弓矢の治療〉のように「治療」と訳すことにする。
- (4) 本研究の資料は、私が1988年度より参与観察を始めた初潮儀礼に関する記録、1994年度および1995年度に集中的におこなった儀礼に関する聞き取り調査の結果をもとにしたものである。
- (5) ツィヤーハには、「巧みだ」「精通している」という意味もある(菅原、1999)。ツィーは呪術も意味し、「彼は雨雲をツィー(呪術で操作)する」という。ツィーは名詞で歌や踊りをさし、「ダンスを歌い、踊る」ことを「ツィーを言い、踏む」と表現する。また、「ツィーにおいて死ぬ」とは「踊ってトランス状態になる」ことである。これらから、ツィーとは「超自然的な力にかかわる(菅原1993:154)」概念だけでなく、「修練によって日常を超える能力を得る」という意味があると想像される。
- (6) 動物の毛皮を四角く切ったもので、大きさによってマントのように身体全体を覆ったり、ケープのように上半身にまったりする。皮のローブを風呂敷のように使って、採集物や家財道具を包んで運搬することもある。かつては寝具の役割もはたしていたようだ。現在は、市販の毛布がこれの代用をしているが、高齢者は今日も洋服の上から皮のローブをまとうことを愛用している。
- (7) 少女を隔離するための小屋にはとくに名称はついていない。ただ、「新たな小屋」という。ブッシュから木を切ってきて、囲いだけの屋根の無い小屋を急

- ごしらえて建てることもあるが、キャンプの古い建材を利用したり、ときには、空き家をそのまま初潮儀礼に使うこともある。新婚の夫婦も「新たな小屋」を建てて住むが、かつては初潮儀礼は結婚と直結していたので、初潮儀礼のために建てた小屋をそのまま新居に使うこともあったらしい。
- (8) かつては床に敷き詰めた草は、月経が終わるまで替えなかった。現在は、市販の毛布を敷いて横たわり、下着をこまめに洗っては付け替えることで衛生を保っている。
- (9) グイの親族名称では、父または母を共有する兄弟姉妹のほかに、父母の同性の兄弟姉妹の子どもたち（人類学でいう平行イトコ）も同じカテゴリーに入る。これらをここではキョウダイとする。また、父母と同性で父母より年長のキョウダイ、父母と異性のキョウダイは、オジ、オバといわれる。また、オジと祖父、オバと祖母は親族名称において同一である。グイの親族名称については、Ono (1996) の詳細な研究がある。本稿では、オバ、キョウダイなど片仮名で表記したものは、グイの親族カテゴリーを指すことにする。
- 儀礼を執りおこなう人は、少女と親族関係にあるオバ以外にも、少女が住んでいるキャンプの年長者の女性になる。また、1人とは限らず数人が話し合っておこなうこともある。本稿では、中心的に儀礼を執りおこなう女性を便宜的に「オバ」と記すことにする。
- (10) 黒い「薬用植物」の根/kee ii (*Hermbstaedtia linearis*) と、 $\neq$ nan $\neq$ ke (*Bauhinia petersiana*) という野生の豆を一緒に杵でついて粉状にしたもの。子どもの成長促進の働きがあると考えられており、「補助食品」のように、日常的に子どもに食べさせることもある。初潮儀礼は少女の成長も祈願しているので、〈食べる薬〉が多用される。
- (11) 初潮儀礼で踊られるダンスの名称は「エランド」の他に、ツエレ (/kere) (「女だけの歌と踊り」の意味)ともいう。また、「鳥の羽ばたきを歌うlnaa-ma//nae」とも表現する。これは、女たちが手をたたく様子が鳥の羽ばたきに似ているからである。
- (12) 大型動物を狙う狩猟方法は、弓矢猟、犬槍猟、騎馬猟がある。弓矢猟は技術的に難しいので、現在は
- おこなわれない。猟法については、池谷 (1989), Osaki (1984) に詳しい。
- (13) これは、遊動生活を送っていたときの、身体を清める一般的なやり方であった。初潮儀礼で小屋に隠っている少女は、毎日オバに経血と垢を種子の粉と一緒に擦り落としてもらう。
- (14) グイ/ガナの親族名称にしたがって、ここでは平行イトコはキョウダイと表し、交叉イトコのみを「イトコ」と書くことにする。
- (15) 伝統的には、スチーンボックの皮で特別に作った。少女の父、オジ、夫 (いいなずけ) などの親近者の男性が作った。現在は、市販のスクーフで代用するようになり、少女の親近者が町で買って少女に与えている。
- (16) 1970年代までこの習慣は続いていたようである。現在は、初潮前から婚約者が決まっている人はまったく見かけない。結婚も、初潮を経て数年たつてから20才前後でおこなっている。伝統的生活をおくっていた頃の初潮儀礼は、別の言語グループであるクン (Ikung) を研究した Howell (1979) によると、およそ16歳であった。現在のグイ/ガナの少女の初潮年齢は、12~13歳まで低年齢化しているという印象をもつ。
- 「いいなずけ」も「夫」もグイ語では「私の男」(第三者がいう場合は「彼女の男」と、所有格をつけて同じ表現をする。
- (17) 儀礼一般についての論文 (今村, 1998) で述べたように、彼らがおこなう結婚の儀礼は、形式的に結婚前と結婚を分けるものではなく、性行為にともなう「病気」の実質的な「治療」であると見なされている。
- (18) かつては弓矢猟が中心だったから、このように弓矢を片づけた。現代は騎馬猟が中心であり、初潮が始まる前に男たちが狩に出かけてしまった場合は、男たちが帰って来るまで踊りはおどらないというハプニングが1990年に観察された。
- (19) 一般の月経中のタブーは少ない。タブーの1つが性交を禁ずるものであり、このタブーを破ると男性は生殖器から血を流す病気にかかるという。また、狩猟についてもタブーがある。月経中の女性は夫の弓矢や槍に触れてはいけない。月経中の妻は、夫が獲つ

てきた肉を自分が熾した火で調理してはいけない。これらのタブーを破ると、矢や槍が命中した動物が「(月経中の女性のように)血を流しながら平気で逃げ去ってしまい、夫の狩猟は成功しなくなるといふ。

しかし、これ以外のタブーはなく、女性は月経中も通常どおり水汲み、採集、訪問に出かけている。

- (20) この儀礼の詳細は、今村(1998)を参照されたい。
- (21) ナーホは儀礼にともなう食物だけでなく、個人的に体質が合わないなどの理由で口にしない飲食物(酒や煙草も含む)のことも指す。菅原(1998)は「食べると病気になる」ものがナーホの意味であると述べているが、本稿で明らかにするように、動物との関係は「食物関係」にのみ限定されるのではない。
- (22) このように動物の呼び名を変えたり、肉食を回避することは、成人儀礼に参加した男性、また、治療師に見習い中の者もおこなう。
- (23) 初潮前の少女をドバーナハ≠gobanaha、初潮儀礼中の少女をツィヤーハまたはガエコロハ//gae-koroha(「女になっている」の意味か?)、儀礼後の「若い女性」をガレガエ//gare//gaeという。ドバーナハは、成人儀礼前の男性をも意味する。
- (24) 〈弓矢の治療〉が、弓矢猟が衰退してもおこなわれるといった、儀礼だけが形骸化して残るといふことがない。これは、かれらの儀礼が、実用的な「治療」であり、実践のともなわない部分は簡単に廃止されるからである。

## 引用文献

- アレン, M. R. 1978(1967)『メラネシアの秘儀とイニシエーション』中山和芳訳, 弘文堂
- エリアーデ, M. 1971(1958)『生と再生』堀一郎訳, 東大出版会
- フレーザー, J. G. 1951-52 (1890)『金枝篇』全5冊, 永橋卓介訳, 岩波書店
- Howell, N. 1979 *Demography of the Dobe !Kung*. Academic Press, London
- 池谷和信 1989「カラハリ中部・サンの特猟活動——犬猟を中心に」、『季刊人類学』20(4): 284-332
- 今村 薫 1998「グイ・ブッシュマンにおける儀礼と治療」、『名古屋学院大学論集(人文・自然科学編)』34-2: 43-83
- 今村 薫 1999「グイとガナの民族生殖理論と父性」、『名古屋学院大学論集(人文・自然科学編)』36-1: 11-20
- Ono, H. 1996 An ethnosemantic analysis of Gui relationship terminology. *African Study Monographs Supplementary Issue 22*: 125-144
- MA:Osaki, M. 1984 The social influence of change in hunting technique among the Central Kalahari Hunter-gatherers. *African Study Monographs*, 5: 49-62.
- 大崎雅一 1996「歴史的観点から見た | Gui と || Gana ブッシュマンの現状——セントラル・カラハリの事例より」、『民族学研究』61(2): 263-276
- Silberbauer, G. B. 1963 Marriage and Girl's Puberty Ceremony. *Africa* vol. 33 (3): 12-24
- 菅原和孝 1993『身体的人类学——カラハリ狩猟採集民グウィの日常行動』, 河出書房新社
- 菅原和孝 1994「ひとりのグウィの女が死んだ——セントラル・サンにおける『死のコンテクスト』」, 井上・祖田・福井編『文化の地平線——人類学からの挑戦』, 世界思想社, 393-413頁
- 菅原和孝 1996「狩猟採集民の宗教的世界と自然観——アフリカ南部グイ・ブッシュマンの社会より」, 有福孝岳編著『現代における人間と宗教——何故に人間は宗教を求めるのか』, 京都大学学術出版会, 29-59頁
- 菅原和孝 1998『語る身体の民族誌——ブッシュマンの生活世界(Ⅰ)』, 京都大学学術出版会
- 菅原和孝 2000『もし、みんながブッシュマンだったら』, 福音館書店
- 田中二郎 1978『砂漠の狩人——人類始源の姿を求めて』, 中央公論社
- 田中二郎 1986「集住化・定住化にともなう変化の過程——セントラル・ブッシュマンの事例から」伊谷純一郎・田中二郎編『自然社会の人類学——アフリカに生きる』, アカデミア出版会, 313-348頁
- ファン・ヘネップ, A. 1977(1908)『通過儀礼』綾部

恒雄・裕子訳、弘文堂

付表 初潮儀礼の手順

1 日常生活からの分離

(1) <帰らせる>

①オバが saasa (木本, 未同定) を噛んでから唾を少女の足に吐きかける。

②唾を経血の染み込んだ砂に吐きかけ、その砂を灌木の根元に捨てる。

③少女を頭からロープで覆って隠し、女たちが取り囲んで歩く。

④キャンプが近くなると、オバが少女を背負う。

(2) <食べさせる>

①オバが saasa を噛んでから唾を少女に吐きかける

②少女の利き手の拇指丘に、剃刀で2本の傷をつける。

③傷口に <食べる薬> をのせる。

④オバが少女の手首を握り、傷口のついた <食べる薬> を少女に食べさせる。

(3) <排便させる>

①オバが saasa を噛み、排使用の小枝に唾を吐きかける。

②その小枝で、オバは少女の尻をきれいにしとやる。

(4) 「いいなずけ」とおこなう儀礼

(4)-1 <火をおこす>

①オバが いいなずけ を呼び「火を私たちにくれ」という

②少女と いいなずけ が背中合わせに坐る。

③いいなずけは「この女を娶れたらなあ」といいながら火おこし棒で火を点ける。

④いいなずけは火おこし棒と受け木の2本を少女の枕元に刺し立てて帰る。

(4)-2 <垢を混ぜ合う>

①オバが薬木!gari ii (*Pavonia clanthrata*) をナイフで細かくけずる。

②オバが いいなずけ を小屋に呼ぶ。少女と いいなずけは薬木を混ぜた水で手を洗う。

③オバが、いいなずけに「おまえの汚れを彼女の腿の上でふきとれ」という。いいなずけは少女の腿に濡れた手をこすりつけ、さらに || nan (*Citrus lanatus*) の種子の粉を腿にまぶして垢と一緒にこすり落とす。

④同様に、少女が いいなずけ の腿に濡れた手をこすりつけ、粉をまぶして垢と落とす。

(4)-3 <食べさせ合う>

①オバが いいなずけ の手のひらに <食べる薬> をのせる。彼は少女の口に <食べる薬> を放り込むように入れて食べさせる。

②オバが少女の手のひらに <食べる薬> をのせ、少女が いいなずけ に食べさせる。

(いいなずけと少女の順序はどちらが先でもよい。)

③いいなずけは少女の小屋を出て帰る。

(5) <垢を> こすって (小屋から) 出す

(5)-1 <血を混ぜ合う> いいなずけとの結婚

① || nan の種を粉にしたものを、身体に付けて垢と一緒にこすり落とす。

①オバが、少女と いいなずけ の、眉間、胸の中心部、両肩先、両肘、両膝、背中、腰、へその下 (男性)、へその両側 (女性) に剃刀で傷をつける。

②オバが、それぞれの傷口からにじみでてい

る血をとり、男性の血を女性の傷口へ、女性の血を男性の傷口へ、同じ傷口の場所へ塗りこむ。

③男女の、眉間、胸、背中、腰の傷口に、薬木を入れる。薬木は、!goð/koa (*Cassia bienesii*)、!garii (*Pavonia clanthrata*) または simexa (*Hermbsstaedtia linearis*) の根を黒く焼いたものを、混ぜて細かくすりつぶしたものである。

④男女の、肩、肘、へその下、膝の傷口に、〈食べる薬〉をのせる。

⑤オバが、〈食べる薬〉を口にふくませて、その粉を、男女の肩、肘、へその下、膝、胸に吹きかける。

⑥オバが男性の手のひらに〈食べる薬〉をのせ、男性は女性の口に放り込むように食べさせる。

⑦オバが女性の手のひらに〈食べる薬〉をのせ、女性が男性に食べさせる。

(男女の順番はどちらが先でも良い)

その後、傷口が痛めば、エランドの脂肪で作った薬を塗り付ける。

#### (5)ー2 〈帽子を被らせる〉

少女のイトコたちが少女に儀礼用の帽子を被らせる。

#### (6) 〈額を開く〉

オバが、!k'ao (*Stipagrostis sp.*) というイネ科の草で少女の目を覆ったまま少女を小屋の入り口に立たせる。それから、オバがその草を真ん中で折って外の明るい世界を少女に見せる。

#### (7) 〈訪問させる〉

少女はイトコたちに付き添われて、小屋から3方向に歩く。集まってきた女たちの間を通して、頼りなげにゆらゆら歩く。次に、最も近い

小屋から順に人々を訪問する。

#### 2 日常生活を送りながらおこなう儀礼

##### (8) 〈弓矢の治療〉

少女の〈雄のエランド〉が終わると、少女はオバに教わりながら次のことをおこなう。

①キャンプの男たち全員の矢尻と矢軸を集める。

②矢軸を砂に刺し立てて、エランドの脂肪でつくった塗り薬(/xaa-xo)を矢軸の矢尻を受ける部分に塗る。

③矢軸に矢尻を差し込み、今度は矢尻に同じ塗り薬を塗る。

④キャンプの中で、オバと少女が一緒に弓を持ち、薬を塗った矢を次々とつがえては放つ。的として動物の皮を置く。

⑤矢を男たちに返す。男たちは、この矢を持って狩猟に行く。

##### (9) 〈根茎を掘らせる〉

①オバが saasa を少女に噛ませて自分も噛み、自分の掘り棒に唾をはきかけてから、少女にもオバの掘り棒に唾をはきかけさせる。

②採集する根茎の地上部に、オバが唾をはきかけ、少女も同様に唾をはきかける。

③オバが少女に掘り棒を握らせ、オバもその上から手を添えて、2人で掘り棒を握る。

④2人で一緒に砂を掘り、根茎に達したら、再び2人で saasa を噛んでから根茎に唾をはきかける。それから2人で根茎をひき抜く。

⑤一度掘った根茎を、オバが今掘った穴に埋める。

⑥その根茎を、今度は少女が1人で掘り棒で掘り出す。

⑦オバと少女の2人で、掘った根茎のツルをちぎって穴に入れ、その穴をきれいに埋める。

穴を埋めるとき、「蛇や肉食獣などのパーホ(咬むもの、悪者の意)に出会いませんように。」と、2人で唱える。

⑧オバが少女に手を添えて根茎を拾わせ、それを皮のロープに入れさせ、そのロープを背負わせる。

⑨オバが、少女に根茎をロープから取り出させる。

⑩今度は、少女が1人で根茎を拾って、皮のロープに入れ、ロープを背負う。

(10) <薪を担がせる>

①オバが saasa を少女に噛ませて自分も噛み、2人で薪にする枯れ木に唾をはきかける。

②その枯れ木を2人で折取る。

③別の枯れ木を少女が1人で折取る。

④オバと少女の2人で薪を皮のロープに入れる。

⑤オバが、少女に、今入れた薪をロープから出させる。

⑥今度は、少女が1人で薪を皮のロープに入れる。

⑦オバが少女に、薪の入ったロープをヘッドバンドで額から背負わせる。

⑧オバが少女に、背負ったロープを地面に置かせる。

⑨今度は、少女が1人で薪の入ったロープを額から背負う。

(11) <草をひかせる>

①オバが saasa を少女に噛ませて自分も噛み、2人で小屋を葺くための草に唾をはきかける。

②その草を2人で引き抜く。

③オバが、少女にその草を担がせる。

④オバが、少女に担いだ草を地面に降ろさせ

る。

⑤今度は、少女が1人で草を引き抜き、肩に担ぐ。

⑥オバが、少女に引き抜いた草を皮のロープに入れさせる。

⑦オバが、少女に草の入ったロープを額から背負わせる。

⑧オバが、少女に担いだロープを地面に降ろさせ、ロープから草を出させる。

⑨今度は、少女が1人で草をロープに入れて、ロープを額から背負う。

(12) <水場の治療>

①オバが少女を水場の近くにすわらせる。

②オバが1人で水場まで行き、水とパンの石灰土を別々の入れ物に少しずつ入れて来る。

③オバが、少女のスネに石灰土を塗り付け、その上から水を注ぐ。

④少女は足踏みして、スネをつたう水を下に流す。

⑤オバが saasa を少女に噛ませて自分も噛み、2人でパンに生えるアカシアの/qari(*Acacia nebrownii*)に唾をはきかけ、2人で1枝折り取る。

⑥2人で水場に行き、/qariで水面を打ってしぶきをあげさせたあと、/qariを水場に投げ入れる。

⑦2人で入れ物に水を汲み、その水を放り上げて、再度、水しぶきをあげさせる。

⑧少女が1人で水を汲み、いくつかの水筒を満たす。

⑨オバが、少女にそれらの水筒を皮のロープに入れさせ、額から背負わせる。

⑩オバが、少女に背負っているロープを降ろさせ、ロープから水筒を出させる。

⑪今度は少女が1人で水筒をロープに入れ



てから背負う。

3 繰り返しめぐる月経

(13) 2回目の月経〈雌のエランド〉

(1) 〈帰らせる〉から〈12〉〈水場の治療〉まで、すべてをもう一度繰り返しておこなう。

(14) 3回目の月経〈歯と腹の治療〉

①オバが, !gođ/koa (*Cassia bienesii*), !garii (*Pavonia clanthrata*) または simexa (*Hermbstaedtia linearis*) の根を焼いたものをすり潰す。

②少女のオバが若者たちの下顎と胃のところを剃刀で傷つける。

③少女が傷口に①の〈薬〉を塗り込む。

④少女が自分の唾液を傷口に塗り込む。

⑤少女が若者たちに〈食べる薬〉を食べさせる。

4 儀礼の終了

(15) 〈帽子を脱ぐ〉

少女が決心したときに儀礼用の帽子を脱ぐが、とくに儀礼はおこなわない。これで、初潮儀礼はほぼ終了したことになる。